

X 調査の成果

今井条里遺跡における地割の変遷—一条里型地割の成立と崩壊過程—

今井条里遺跡では、4つの遺構面で水田跡・灌漑施設等を検出した。周辺には、対応する時期の遺跡が広く分布している。下に、周辺遺跡の動態に触れつつ地割の変遷を検討し、調査のまとめとしたい。

(1) 水田跡の年代観

前提として、各遺構面で検出した水田跡の年代を整理しておきたい。

第1遺構面で検出した水田跡は、白色火山灰によって覆われていた。これは層理・分析結果から1783年に噴出した浅間山起源の火山灰(As-A)であることが確実である。水田跡・溝跡には降灰層準が堆積しており、遺構の年代は1783年としてよいことになる。第2遺構面で検出した水田跡についても、同様に1108年噴出の浅間山火山灰(As-B)に覆われており、降灰層準で埋没した遺構の年代は1108年与えられる。

第3遺構面で検出した水田跡・溝跡上面には洪水砂VI層が堆積していた。この洪水砂は女堀川・SD54によってもたらされていた。SD54中のVI層には古墳時代末の遺物が含まれていた。上層のAs-B、下層のHr-FAからみて、遺物の年代は支持できる。埋没水田跡の年代は古墳時代後期のうちとしてよいだろう。

第4遺構面は上層を覆う基準層がなく、年代の推定が難しい。検出した水田跡にともなう用水路跡SD11からは、古墳時代前期の土器が多く出土している。テフラ分析では耕作土VII-2層中にAs-Cが、上層にHr-FAが検出されている。テフラ分析の結果では、水田跡・用水路跡には、4世紀中頃以前の年代が想定できるが、土器編年も含めて、現在のところ年代は流動的である。明示するのは避けておきたい。

(2) 今井条里遺跡における地割の変遷 (第149図)

確認できた最下層の水田土壌は、第4遺構面をなす古墳時代前期のものであった。主体となる灌漑施設は、旧女堀川から引水したと思われるSD11である。SD11を境に、東側は河川堆積物が厚く、西側には台地上面

が浅く地表下にせまっていた。SD11の位置は、旧地形では、台地上面縁辺より若干下った部分にあたるといえる。調査範囲北部では、台地露出部分と低地的景観部分の境界は、南西から北東方向に走っていた。SD11は、J 4グリッドから北に500mほど延びた地点で台地上面にあたると、北東方向に向きを変え、この地形境界線に沿って掘削されていた。

水田域は、SD11の南東側の低地的景観部分で検出した。周囲の台地上面には、点々と同時期の集落跡を検出している。今井条里遺跡、地神遺跡、塔頭遺跡、川越田遺跡、後張遺跡等である。検出した水田域をとりまくように立地する集落の様子がみとれる。水田跡と水田土壌の分布からみた調査範囲内の可耕地面積は63,000㎡ほどである。

古墳時代中期には、SD11上にSD7が浚渫される。延長と思われるSD177は、SD11に並行しつつ北側へ位置を変えており、可耕地面積を広げていたことがわかる。同時期の集落は、北側の台地上面で確認されており、集住が顕著である。西富田新田遺跡や夏目遺跡が代表である。近辺では後張遺跡が立地していた。調査範囲内の予想可耕地面積は82,000㎡ほどである。

同じく第4遺構面では、古墳時代後期の用水路跡を検出することができた。SD7埋没後に掘削された幹線用水路跡SD94・95である。地割はSD7を踏襲しており、G 4グリッドで直角に東流するSD6も掘り直され、SD5となっていた。この時期には、女堀川自然堤防上に今井川越田遺跡・川越田遺跡・後張遺跡・梅沢遺跡などの大規模集落が形成されている。可耕地面積は前代と同規模と考えられる。

時期の詳細は出土遺物から検討しておこう。SD5と連続するSD94、同溝中のSK1からは土師器杯が得られている。児玉郡域では土器編年の研究が盛んで、骨格はほぼ完成している。本書では、従来の成果を受けて行われた今井川越田遺跡の土器編年(磯崎1997)、お

よび近年の畿内の状況を包括的に検討して編まれた土器編年（坂野・富田1996）を基に出土遺物の年代を推定する。両編年案は、近年の須恵器編年の流動性と、新出の木簡資料等を加味したもので、現時点では妥当性の高いものである。

SD5出土の第144図56、SD94出土の第144図57は、ともに有段口縁杯である。稜を凹線とナデ、段をナデによって作り出しており、7世紀第1四半期を中心とした磯崎編年V期、坂野・富田編年I段階に相当する。SK1出土の第110図1は模倣杯であるが、稜は凹線とナデで作ridされており、7世紀第2四半期を中心とした磯崎編年のVI期以後、坂野・富田編年のII段階に相当する。このことから、7世紀の前半代までにはSD11・7が埋没し、SD94・95からSD5に至る用水路跡が掘削されていたと考えられる。

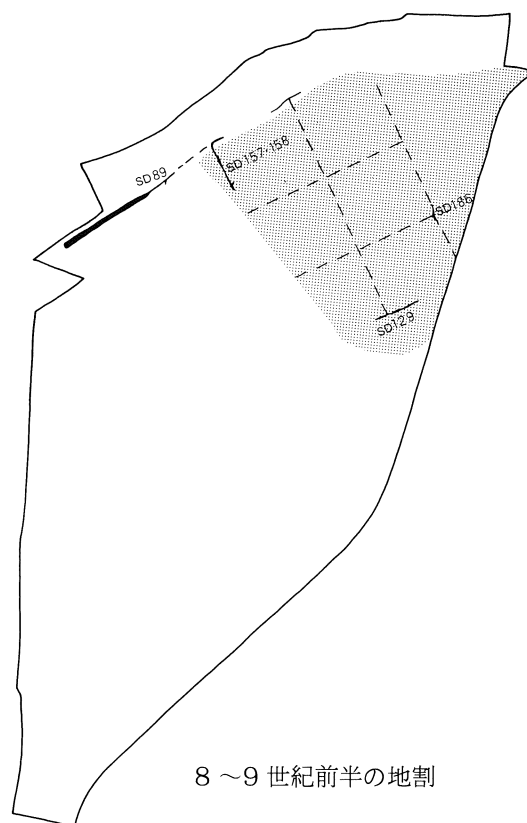
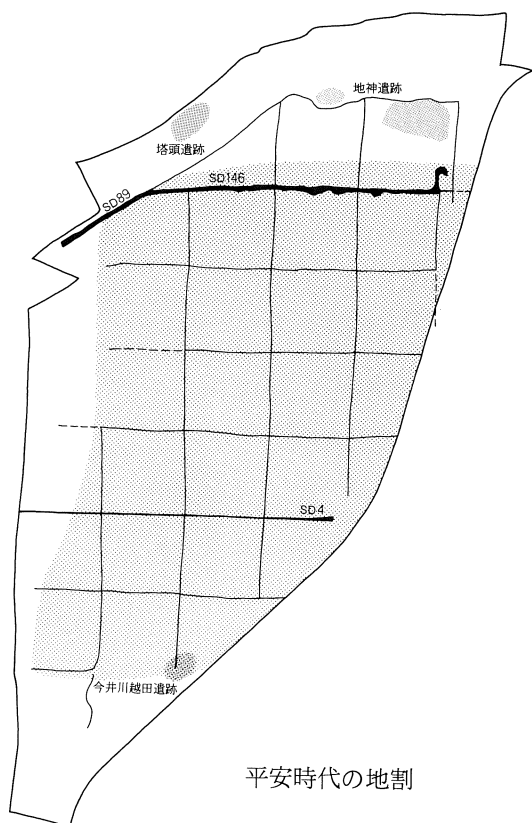
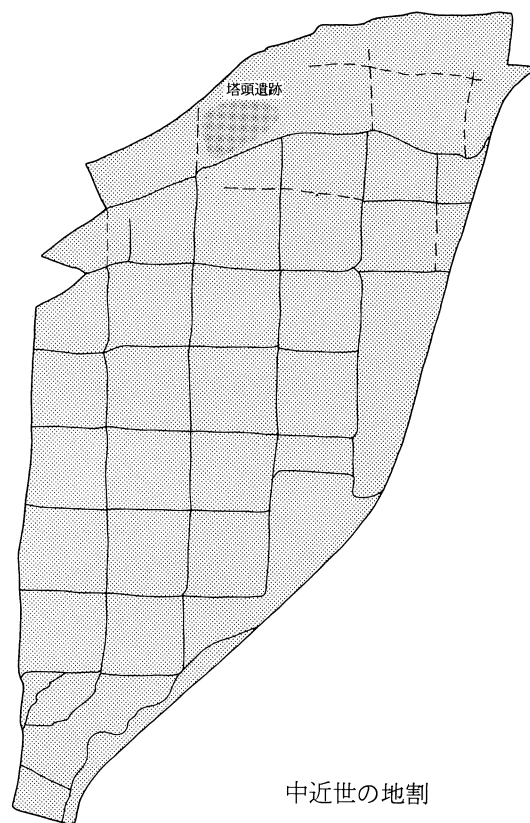
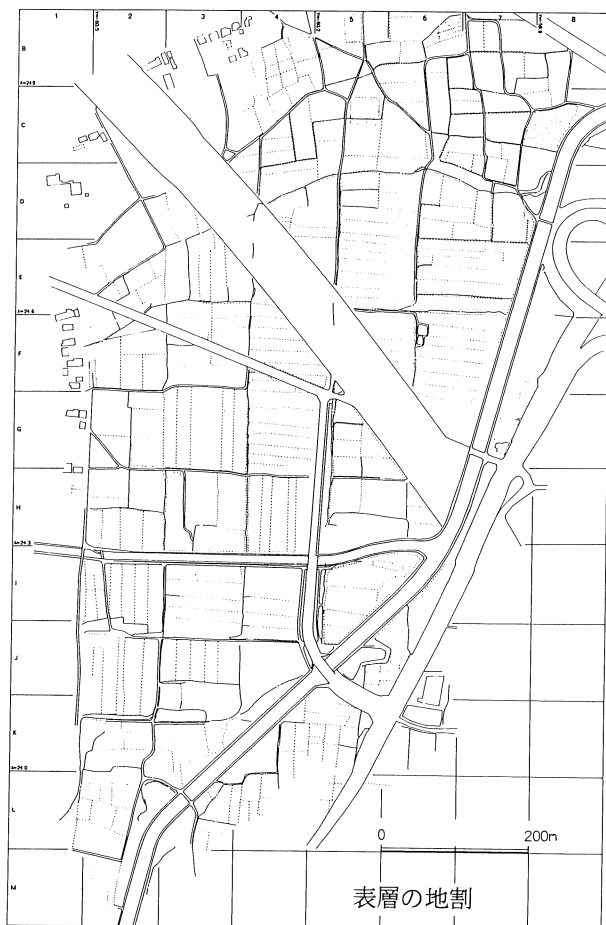
第3遺構面では、女堀川およびSD54周辺に水田跡を、調査範囲北東部に2時期の条里型地割を検出した。水田跡は上部を洪水砂VI層に覆われていた。主な灌漑施設はVI層で埋没したSD54等であった。SD54の用水路跡はN-127°-E程度の傾きで南東へ引水しており、G3グリッド付近でN-95°-Eに向きを変えていた。取水元はSD89上流に向いており、SD54の覆土（VI層対応の砂層）がSD89底面付近の砂層に類似していることから、一連の灌漑施設である可能性がある。しかし、SD54上層には、SD89にないシルト層があり、G3グリッド以東の流路は古墳時代後期のSD5を踏襲するものであった。また、SD54に堆積したVI層からは、内屈口縁の土師器杯（第97図62）が出土した。ケズリは口縁部直下まで行われ、口縁が短く内屈している。定形化したものと考えられ、坂野・富田編年のIV段階古相に相当すると思われる。SD89出土土器は、内屈口縁杯でも直立に近い口縁となっているほか、口縁直下がヘラナデか未調整となるものが主体で、掘削時期の上限は坂野・富田編年のV段階以降、7世紀第4四半期以後としてよいだろう。SD54が古墳時代後期の地割を踏襲していることを考えると小区画水田跡は7世紀第3四半期頃までに埋没したものと推定できる。この時期

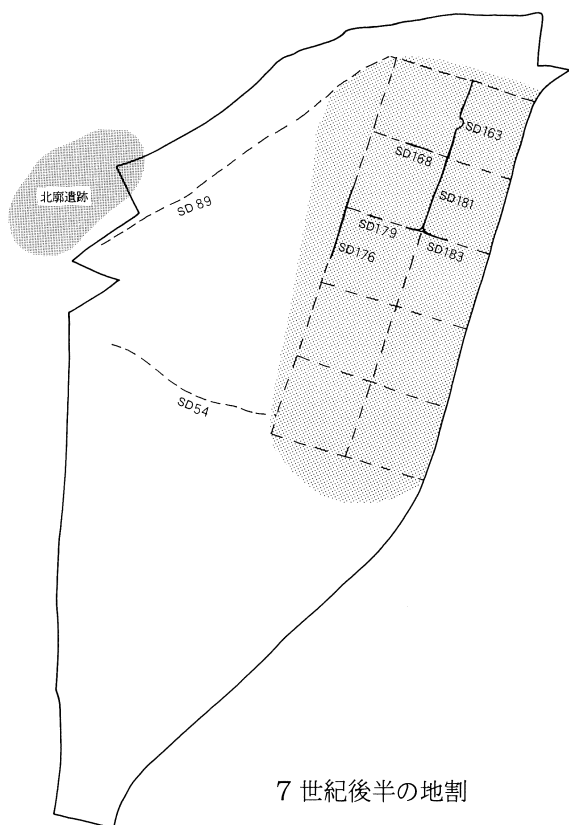
には、古墳時代後期の大規模集落跡今井川越田遺跡・川越田遺跡が終焉を迎える。なお、地割から想定したSD54の取水元には、SD89の前身となる溝跡の存在が想定できる。可耕地面積は130,000m²程度であろう。

第3遺構面では、他に2時期の条里型地割を検出した。一方の第32・33号坪型区画跡がのる地割は、南北軸でN-17°-Eの傾きをもっており、一辺約109mの非常に整った1町方格の坪並をなしていた。坪界線をなす溝跡はしっかりした掘り方の直線で構成されていた。坪型区画跡内部の区画は長地型類似の地割で、短辺11m程度の整った1段に区画されていたようだ。溝跡の覆土はSD54の堆積状況に類似しており、第32号坪型区画跡西辺坪界線の最下層のSD182が細砂、浚渫後のSD163がシルト、181が砂礫、同北辺坪界線のSD168はシルトで埋没していた。出土遺物は、SD181底面から内屈口縁杯（第97図61）が出土している。口縁が短く内屈しており、直下のみケズリ後ナデつけられている。7世紀第3四半期を中心とした坂野・富田編年IV段階に相当する。古墳時代後期の地割を踏襲したSD54がVI層で埋没していたのに対し、明瞭なVI層の堆積をもたないSD163・181・182・183や同一の条里型地割をなすSD176は、一段階遅れる時期を想定するのが妥当である。SD54と小区画水田跡が7世紀第3四半期以前に埋没したのに対して、直後の7世紀第3～4四半期には機能していたものと考えられる。現状では堆積層理・土壌層位・出土遺物・地割の継続状況などの状況証拠に矛盾する材料はない。主要灌漑施設はSD89前身であったと予想できる。同時期の集落は、八幡太神南遺跡・今井遺跡群G地点などが北部の台地上面に出現している。可耕地面積および条里型地割の広がり是不明である。

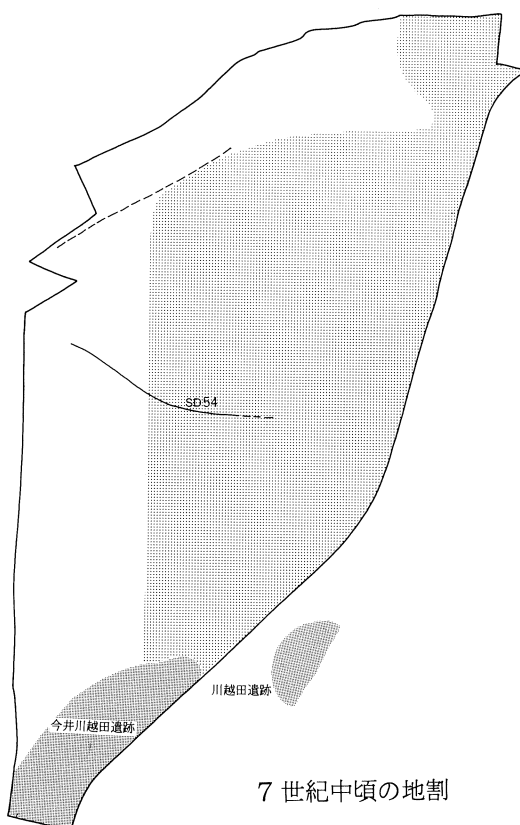
もう一方の条里型地割である第35・36号坪型区画跡は、南北方向を軸にとるとN-22°-Wの傾きをもっており、一辺約109mの整った1町方格の坪並をなしていた。坪界線をなす溝跡は底面に規則的な凹凸をもち、わずかな蛇行があったが、ほぼ直線で構成されていた。第35号坪型区画跡南辺坪界線をなすSD128・129、東辺

第149図 今井条里遺跡における地割の変遷

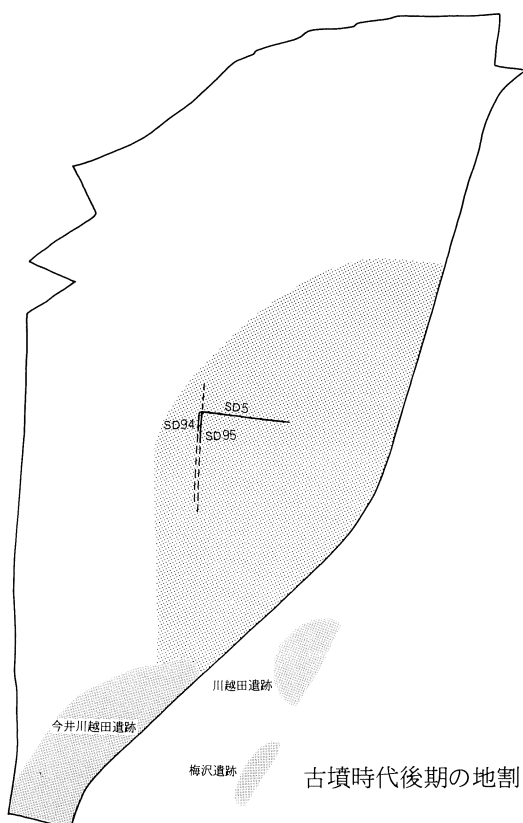




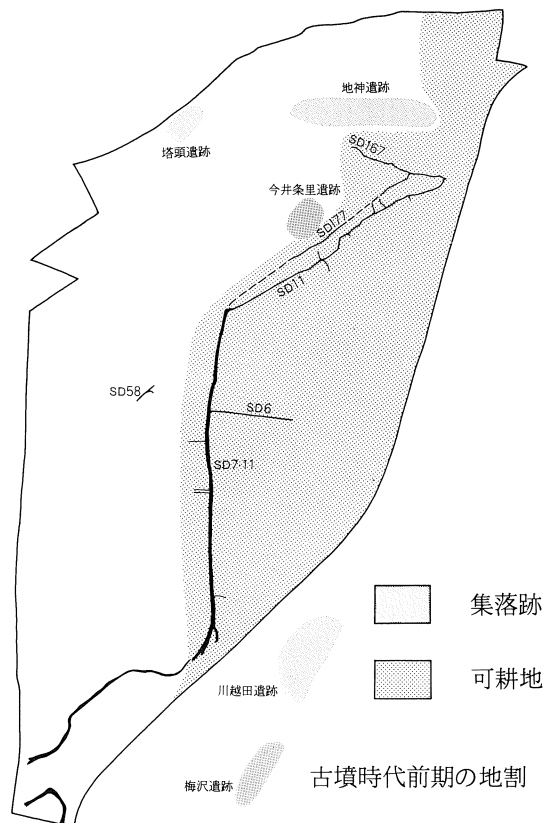
7 世紀後半の地割



7 世紀中頃の地割



古墳時代後期の地割



古墳時代前期の地割

集落跡
可耕地

坪界線をなすSD186、SD89延長の地神遺跡SD4から分流すると考えられ条里型地割の一部をなすSD157・158等、いずれも細砂を覆土としていた。SD157・158の覆土とSD89覆土の類似関係、および地割上の連続関係、さらにSD157・158は第2遺構面で検出した9世紀前半以後のSD146に切られていたこと、地割の一部が第2遺構面の第24号坪型区画跡に踏襲されていたことを含めると、この条里型地割は遅くとも8世紀前半以後9世紀前半頃に機能したものと考えられる。主要灌漑施設は、現九郷用水延長上に検出した大規模用水路SD89である。出土遺物の状況から、この時期までには掘削されていたと考えられる。集落跡では、北廓遺跡・今井遺跡群・八幡太神遺跡・立野南遺跡などが継続している。また、SD89の掘削年代である7世紀末には、大規模集落跡である古井戸・将監塚遺跡、皂樹原・松下遺跡が相次いで出現している。古井戸遺跡ではSD89と同時期の大溝跡が検出され、分流する支線がSD89とほぼ4町間隔で並行する地割上に延びていた。大規模水路を基本とした広範囲での開発を示す状況証拠となるだろう。可耕地面積および条里型地割の広がり是不明である。

第2遺構面では、正方位の条里型地割を広範囲に検出した。検出した遺構は、1108年降下のAs-B層直下のものが主体である。坪型区画跡は南北方向が完全なN-S、東西方向がN-92°-Eの傾きをもっており、一辺約109mの整った1町方格の坪並をなしていた。坪界線には幅1m前後で直線的な地割をとる大畦畔を検出した。大畦畔中央には用水路跡が設けられる場合があった。用水路跡は浅く、底面に不規則な凹凸をもち、弱い蛇行が認められた。坪型区画跡内部は南北の小畦畔に水懸かりを規制された小区画水田跡を連ねており、長地型類似の地割となるものが多かった。東西の小畦畔には坪型区画跡を貫通するものもみられたが、明確な半折型地割は検出できなかった。正方位をなす条里型地割の上限は、主要灌漑施設SD146、および第22・28号坪型区画跡北辺坪界線をなす地神遺跡SD68・106によって推定できる。SD146は2度の浚渫を受けてい

たが、底面では平安時代前半の土師器杯を多く出土した。

本書では、平安時代以後の土師器について、児玉地域での従来からの編年観、灰釉陶器編年、皇朝十二銭の出土を考慮して編まれた土器編年（篠崎1992）を、須恵器については県内の須恵器編年の基礎となった酒井清治の編年（酒井1987）を基に、暫定的に年代を推定しておこう。黒笹90号窯式期の年代幅と位置づけの変更にともない、将来多少の訂正が求められるかもしれない。また、9世紀後半以後の須恵器編年については、近年の窯跡調査にもかかわらず、判然としない状態であるため、大枠を示した酒井編年にしたがうものである。

SD146底面付近の出土土器（第97図65・72・76）は、篠崎編年のIX期前後、8世紀末から9世紀前半に相当する。地神遺跡SD68・106は、8世紀後半から9世紀前半に形成された竪穴住居跡をよけて掘削されていた。直線的な用水路跡であったが、集落を避ける蛇行は顕著であった。溝跡からは、確実に8世紀まで遡る出土遺物は得られていない。なお、SD146には浚渫後に蛇行が現れ、回を重ねる毎に顕著になっていた。蛇行は他の坪界線溝跡でも生じており、計画時の坪界線が次第に意味を失っていったものと考えられる。蛇行初現の溝跡は、酒井編年による9世紀後半から10世紀前半の土器（第97図79）を含んでいた。地神遺跡では、竪穴住居跡・掘立柱建物跡が地割に沿って配列されていた。条里型集落跡の1例としてよいだろう。これらのことから、8世紀後半から9世紀前半までに、正方位の条里型地割が成立したと考えられる。

可耕地面積は175,000㎡以上になる。同時期の集落跡は、独立丘陵上に展開していると考えられてきたが、条里型集落が今後検出されていくと思われる。

第1遺構面では、正方位の条里型地割を全体に検出した。検出した遺構は、1783年降下のAs-A層を覆土にもつものが主体であったが、用水路跡の多くが近現代まで継続していた。坪型区画跡は南北方向がN-S～N-2°-E、東西方向がN-91～96°-Eの傾きをも

っており、一辺77~110m程度の不揃いな方格地割をなしていた。坪界線には、両側の坪型区画跡限界毎に幅1m程で大きく蛇行する大畦畔が設けられ、中央に深く顕著に蛇行する用水路跡が認められた。用水路跡は繰り返し浚渫されていた。坪型区画跡内部は長地型か半折型に地割され、内部に小区画水田跡を設けていた。1筆の面積はまちまちであった。As-Bを含む中世段階の溝跡は若干蛇行するが直線的であった。近世以後の溝跡には著しい蛇行があり、「猿尾状」分水が現れていた。中世段階には塔頭遺跡が出現している。掘立柱建物跡を中心とした集落跡と墓域からなり、条里型地割に沿った配置をとっていた。可耕地面積は300,000㎡以上で、台地上面への拡大が顕著である。

上の変遷は大略次のように捉えられる。古墳時代前期から後期の局地的開発段階、7世紀後半から8世紀前半の地形に則した条里型地割形成期、9世紀前半までの正方位の広範囲条里型地割完成期、9世紀後半頃までの条里型地割安定期、10世紀前半から中世までの坪界線を保守しつつも計画線の正確さが失われる条里型地割崩壊過程初期、計画線の意味が失われ地割を利用した水路網の整備を行い、激しい坪界線の蛇行を生んだ近世の条里型地割崩壊過程後期である。

(3) 今井条里遺跡の調査成果

現在までのところ、発掘調査で検出した条里型地割の最古例は、8世紀初めとされる方格地割を報告した大阪市長原遺跡の例であろう。他に、八尾市美園遺跡では坪界線下に7世紀後半の畦畔が検出されている。しかし、他例も含め、いずれも部分調査であることから状況は明確ではない。考古学の調査事例の評価に対

し、歴史地理学からは、直線的な地割や径溝の出土と条里型地割を区別すべきだとする指摘がなされている(金田1996)。条里型地割は景観全体が遺構であり、同時性のある坪界線が四辺に確認されなければ存在を確認したとはいえない。他に静岡県で奈良時代後半、甲府盆地で8世紀後半と予想されている条里型地割の初現も、検討に耐える事例を探すのは難しい。その原因は、条里型地割が広範囲かつ重層的に調査しなければならないことからくる行政上の限界や、現在の水田調査の技術的限界に求めることができる。

こうした中で、今井条里遺跡で検出した7世紀後半の条里型地割は、調査方法・坪並の把握・出土遺物・周辺の状況等の条件に矛盾がなく、現状では最古の事例を提供したものといえるであろう。一方、歴史地理学・文献史学からのアプローチでは、条里呼称法の完成を宝亀3(772)年頃とし、それ以前の方格地割を通常の条里型地割として認定しない場合もある(金田1996)。しかし、呼称法の完成前後の方格地割を積極的に区別する考古学上の理由はない。今回の調査では、初期の地割ほど計画線が厳しく守られ、正方位の条里型地割にともなう大規模開発の後には溝跡の蛇行がはじまり、条里型地割崩壊過程に入ることが明らかにできた。このことは、完成へ向かう時期ほど意味があることを示しているといえるだろう。

今井条里遺跡の調査後、条里遺跡研究が広範囲の全体像把握に向かうことの必要性を強く感じている。本来検討しなければならない課題は無数にあるが、今後機をみて考えていくことにしたい。

引用・参考文献

- 青木義脩他1987 『大久保条里遺跡発掘調査報告書（第2次）』浦和市遺跡調査会報告書 第81集
- 赤木克二 1989 「小阪遺跡の偽畦畔について」『条里制研究』第5号
- 赤熊浩一他1988 『将監塚・古井戸 歴史時代編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第71集
- 磯崎 一 1995 『今井川越田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第177集
- 磯崎 一 1997 「古墳時代の土器編年と集落について」『今井川越田遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第191集
- 井上尚明 1987 「7世紀における集落の再編成とその背景」『埼玉史研究』第20号
- 岩瀬 謙 1997 『地神・塔頭遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第193集
- 岩田明広 1995 「埼玉県本庄市今井条里遺跡の発掘調査」『条里制研究』第11号
- 梅沢太久夫他1981 『六反田』大里郡岡部町六反田遺跡調査会・埼玉県立歴史資料館編
- 大谷弘幸 1994 「市原条里制遺跡の調査」『条里制研究』第10号
- 落合重信 1967 『条里制』吉川弘文館
- 金田章裕 1985 『条里と村落の歴史地理学研究』大明堂
- 金田章裕 1991 「国図の条里プランと荘園の条里プラン」『日本史研究』332号
- 金田章裕 1995 「条里地割の形態と重層性」『条里制研究』第11号
- 恋河内昭彦1995 『飯玉東Ⅱ・高縄田・樋越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴時・毛無し屋敷・石橋』児玉町文化財調査報告書 第17集
- 恋河内昭彦1991 『真鏡寺後遺跡Ⅲ—C・F・D地点の調査—』児玉町文化財調査報告書 第14集
- 児玉町教育委員会・児玉町史編さん委員会 『九郷用水関係資料集』児玉町史料調査報告 第十二集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993 『研究紀要Ⅳ—水田跡調査の方法と研究—』
- 斎野裕彦 1987 『富沢』富沢遺跡第15次発掘調査報告書 仙台市文化財調査報告書第98集
- 酒井清治 1987 「埼玉県の須恵器の変遷について」『埼玉の古代窯業調査報告書』埼玉県立歴史資料館
- 佐藤好司 1989 「諏訪遺跡（B地点）・久城前遺跡（B地点）発掘調査報告書」本庄市埋蔵文化財調査報告 第15集
- 笹森健一他1977 「南河原条里遺跡の調査」『あたご山古墳・南河原条里遺跡』
- 篠崎 潔 1992 『皂樹原・松下遺跡Ⅳ』皂樹原・松下遺跡調査会報告書 第4集
- 寺社下博 1979 『昭和52年度熊谷市埋蔵文化財調査報告 中条条里遺跡調査報告書Ⅰ』
- 鈴木徳雄 1995 「古代児玉郡の土地利用と方形館の成立—耕地と宅地の存在形態とその推移—」『堀向・藤塚A・柿島・内手B・C・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書 第18集
- 鈴木徳雄 1997 「古代児玉郡の灌漑と地域圏—地域社会における水利権と祭祀権の伝統一」『金佐奈C・児玉条里遺跡上田地区』児玉町文化財調査報告書 第25集
- 鈴木徳雄他1997 『金佐奈遺跡—A1地点の調査—』児玉町文化財調査報告書 第24集
- 積山 洋 1992 「水田遺構の分析」『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅴ後編』財団法人大阪市文化財協会
- 瀧瀬芳之 1997 『今井川越田遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第191集
- 帝塚山考古学研究所編 1994 『古代の水田を考える』帝塚山考古学談話会第500回記念
- 徳山寿樹 1995 『堀向・藤塚A・柿島・内手B・C・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書 第18集
- 徳山寿樹 1997 『金佐奈C・児玉条里遺跡上田地区』児玉町文化財調査報告書 第25集
- 富田和夫・赤熊浩一1985 『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第46集
- 根本 修 1989 「岡山市南方釜田遺跡における条里地割の変遷」『条里制研究』第5号
- 伴瀬宗一 1996 『今井川越田遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第178集
- 坂野和信・富田和夫 1996 「飛鳥時代の関東と畿内—北関東における7世紀の土器様相—」『東アジアにおける古代国家成立期の諸問題』国際古代史シンポジウム実行委員会
- 本庄市 1986 『本庄市史 通史編Ⅰ』
- 増田一裕 1992 『女堀川条里今井地区・前田甲遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告 第20集
- 増田一裕 1992 『今井諏訪遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告 第21集
- 増田一裕 1995 『前田甲遺跡発掘調査報告書—遺物編—』本庄市埋蔵文化財調査報告第20集第2分冊
- 松井 健・近藤鳴男 1965 「静岡県の主要土壌型」『静岡県の土壌』
- 松井 健 1970 「岡山市津島遺跡における弥生時代の灌漑水利用水田の存在について」『考古学研究』16巻4号
- 松井 健 1987 「水田土壌学の考古学への応用」『土壌学と考古学』博友社
- 三土正則 1968 「排水条件の異なる表面水型水田の断面分化、埼玉県槻川流域の4断面について」『日本土壌肥科学雑誌』第28巻3号
- 三土正則 1974 「低地水田土壌の生成的特徴とその土壌分類への意義」『農業技術研究所報告B』第25号
- 三友國五郎1955 「関東地方の条里」『埼玉大学紀要 社会科学編』第8号
- 三好 洋他1983 『土壌肥料用語事典』
- 矢田 勝 1993 「土壌層位と堆積層位」『研究紀要Ⅳ—水田跡調査の方法と研究—』
- 矢田 勝 1993 「条里型地割と水田」『研究紀要Ⅳ—水田跡調査の方法と研究—』